

運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験 (IV)

——「相互性」の程度と対象表象——

中 込 四 郎*・岸 順 治**・井 篁 敬***

On the search for ego identity of the athlete and the sport experience (IV) : Differences in object representations between those with high and with low mutuality scores during the process of ego identity formation

Shiro NAKAGOMI, Junji KISHI and Takashi INO

This report is the fourth in a series of studies examining the process of athletes' ego identity formation as viewed from Erikson's mutuality concept. Here the relationship between subjects' degree of mutuality and their object representations is examined in order to clarify the psychological background of mutuality, as predicted from Nakagomi and Suzuki's scale of ego identity formation process.

Two subject groups were chosen from among 45 college athletes according to scores on the identity formation scale : the high mutuality group consisted of the eight athletes with the highest scores and the low mutuality group the eight with the lowest scores. Rorschach protocols of these two groups were analysed by the Blatt and colleagues' object relations scale.

The differences between the high and low mutuality groups in developmental index of differentiation ($p=.130$), quasi-human detail ($p=.194$), benevolent ($p=.160$), and total human response ($p=.160$) approached significance. The high mutuality group scored higher in these categories.

In addition, one case representative for each group was chosen and analysed in detail. The differences in the two were more salient than those found in the first sample by nomothetical approach.

These results suggest that the high mutuality group is more active in interpersonal relations and higher developmental level of object representations than the low mutuality group. It is also considered that these features of object representations promote to individual's degree of mutuality in the process of ego identity formation.

自我同一性形成過程におけるEriksonの相互性 (mutuality) 概念⁹⁾が、操作的に crisis (危機), exploration (探究・努力), commitment (自己投入) の3側面に置き換えられた¹¹⁾。中込・鈴木^{19,23)}は、こうした相互性の理解から、運動選手の

同一性形成に向けてのスポーツ経験の特徴を探ってきた。しかしその中では、相互性が同一性形成にどのように働きかけているのかを論ずるための情報を多く得ることができなかった。そこで、この相互性のもつ心理的背景をさらに検討すること

* (筑波大学体育科学系)

** (筑波大学体育研究科)

*** (金沢大学教養部)

も必要となってくるようである。

発達主体者である各個人が、とりまく環境（広義の対象）の中で繰り広げる相互性の程度は、環境要因や個人差要因が関係してくる。Rowe & Marcia²¹⁾, Morash¹⁷⁾, Adams & Fitch¹⁾の研究から、社会の側の“Crisis”に対する許容、そして Fry⁹⁾, Timmons²⁴⁾, 他の研究から環境の変化（人生において遭遇する危機的状況）といったような相互相を促進する環境要因を推論することができる。また、外界に対して開かれ、積極的に働きかけるようなパーソナリティといった個人差要因が、Marcia¹⁴⁾, 長尾ら¹⁸⁾, Donovan⁵⁾, 他の研究結果から考えられる。しかしこれらの推論は、自我同一性達成の程度や同一性地位間の差異から導かれた結果であり、同一性形成過程を直接扱ってはいない。本研究では、同一性形成過程における相互性の程度を対象関係論的視点 (object relations theory) から説明することになる。このような立場は、上述した個人差要因にかかわる研究といえるが、対象関係の特徴を明らかにすると同時に、相互性の及ぼす自我発達への影響についても言及できる。

近年、境界例患者の臨床的研究から、同一性拡散に対する対象関係からの理解が深められるようになった。またそれと平行して、対象関係を客観的に査定する心理検査もいくつか開発されている。特に、ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストとする）における人間反応〔H〕や人間運動反応〔M〕は、診断的情報価が高いことから^{13,16)}, その両反応を用いて対象関係を評価する尺度がいくつか考案されている^{2,20,22,25)}。なかでもBlattら²⁾による「対象表象の発達の分析指標」（以下では対象関係スケールとする）²²⁾は、比較的採点基準が明確であり、健常者を対象とした縦断的発達研究や精神病理患者の研究を通して、尺度の有効性が確認されている。

以上のようなことから、本研究では青年期にある運動選手を対象として、個々の同一性形成過程における相互性の程度を、ロ・テストに投映された対象表象 (object representation) から検討することになる。このことにより、同一性形成におよぼす相互性の役割について、若干の示唆を得ることができる。また、これまでに行われてきた Eriksonの自我同一性論⁷⁾に関する測定的研究の多くが、心理・社会的立場からであるのに対して、本研究はメタ心理学 (metapsychology) から接近するものである。

方 法

対象者の選択

1984,1985年の4, 5月を調査期間とし、遠藤の自我同一性尺度⁶⁾, 中込らの自我同一性形成過程尺度¹⁹⁾, そしてロ・テストを大学運動選手(20~21才)に実施した。ロ・テストは片口法¹⁰⁾により個別に施行した。3つの心理テストからの情報提供可能な者は45名であった。この45名の対象者から、同一性形成過程における相互性の程度に基づき、2群をさらに抽出した。同一性形成過程における相互性の高かった者たちを高相互性群 (High Mutuality G.) とし、低相互性群 (Low Mutuality G.) はその程度の低かった者たちの集まりである。両群の特徴はTable 1に示すとうりである。同一性の達成状況が、本研究の分析観点となる対象関係の質に影響することが予想されることから、両群の同一性得点ができるだけ等質になるようにした ($t = 0.938$, $df = 14$, 有意差なし)。Marcia¹⁵⁾の同一性地位 (ego identity status) から両群の特徴をとらえると、高相互性群は同一性達成型とモラトリウム型から主に構成されている。低相互性群は早期完了型と同一性拡散型が含まれている。

Table 1 Differences in Ego Identity and Mutuality Scores between Two Groups

		Identity Score	Crisis	Exploration	Commitment	Mutuality Score
High	M	65.4	16.4	14.9	13.4	44.6
Mutuality G.	SD	11.95	2.77	2.47	3.07	6.50
	(n = 8)					
Low	M	60.8	7.5	4.3	3.9	15.6
Mutuality G.	SD	5.04	2.56	1.16	1.81	3.93
	(n = 8)					

対象関係スケールのスコアリングシステム

ロ・反応プロトコルに適用されるBlattらの対象関係スケールは、次のような内容から構成されている。大きな分析カテゴリーとして、分化 (differentiation), 明細化 (articulation), そして統合 (integration) の3つに分かれている (Table 2)。例えば、人間全体反応 (full human) は疑似人間反応 (full quasi-human) よりも発達水準の高いことが仮定されている。そしてこの両反応は、人間部分反応 (human detail) よりも発達水準が高いとされている。同様に、機能的明細化 (functional), 意図的行為 (intentional), 対象と行為の一致 (congruent), 積極的-積極的相互関係 (active-active), 好意的行為 (benevolent) は、それぞれの下位カテゴリーにおいて最も高い発達水準として位置づけられている。それぞれの反応は、形態水準に基づき良形態反応 (+, ±) と不良形態反応 (干, -) に分けられ、上述してきたカテゴリーに対して検討が加えられる。形態水準の判定は片口法に従った。

スコアリングの方法

両群のロ・反応プロトコルに対して分析を試みる前に、スコアリングマニュアル³⁾およびその適用事例⁴⁾を検討し、両評定者間での共通理解を深めた。分析の対象となるロ・反応は人間反応 (通常, H, (H), Hd, (Hd) とスコアされる) の他に、片口法でAt, Mask, Sex, Art, Obj, A (人間類似の行為) とスコアされるなかで、人間に関係する一部の反応も含まれる。

2人の評定者は独立して、16名のロ・反応プロトコルの分析を行った。各対象者の相互性の程度に関する情報に対しては、知ることなく盲検法 (blind analysis) で進めた。しかし、評定者の1人は、同一性尺度ならびに同一性形成過程尺度の実施、集計に直接かかわってきたことから、完全なブラインドであったとは保証されない。分析対象となる反応選択も含めた8つのカテゴリーごとに、両評定者間の16ケースでの完全一致率は62.5% (行為の動機) から93.8% (反応選択) の範囲であった。その平均一致率は78.9%である。この値はLerner & Peter¹²⁾の報告にみられる70%~93%ともかなり近似しており、評定の信頼性が高いものと考えられる。スコアリングの不一致の認められた反応に関しては、その後、両評定者間で合議

し解決を図った。

結果と考察

1) 高一低相互性群の比較

各ロ・反応を良形態反応と不良形態反応に分け、Blattらの対象関係スケールから評価した。Table 2, 3に示されるM, SDは、各群の集団平均ならびにその標準偏差である。カテゴリーごとの発達指数 (developmental index) は、Lernerらの算出方法⁸⁾に従った。両群間の比較は、Mann-Whitney Uテストを適用し、差の統計的有意性を確かめた。表中に示されている有意性 (P) は、両側検定による値である。

全てのカテゴリーにおいて、通常の有意水準 ($P < .05$) を満足する値を得ることができなかった。特に、不良形態反応に関しては (Table 3), 分析対象となる反応の数も少なく、また両群間の差異もわずかであった。面接やロ・テスト結果の総合評価より、いずれも本対象者たちが健常者であることから、現実検討の低い対象認知での特徴的差異は生じなかったと考えられる。

良形態反応においては、対象と行為の統合における矛盾 (incongruent) と悪意のある行為 (malevolent) のみ低相互性群の方が高い値を示しているが、その他はいずれも高相互性群の方が高い値のようである。両群間でやや有意な差の傾向が認められたカテゴリーとして、人間反応総数 ($P = .160$), 分化の発達指数 ($P = .130$), 疑似人間反応 ($P = .194$), 好意的行為 ($P = .160$) があげられる。

高相互性群は反応総数 (total R) において低相互性群よりも低いにもかかわらず、分析対象となった人間反応を多く産出している。Mayman¹⁶⁾はロ・テストにおけるH反応の出現について、「その人が、内面化されたgood objectsへの関係に対してひどく障害を被っているならば、ロ・テスト刺激に対してH反応の産出を避けることは十分にありえる。飲み込まれたり、同一性を喪失する恐れによって閉鎖的になることがある。また、ある種の禁じられた衝動の放散あるいは抑圧された同一性の側面を行為化する不安によって後ずさりすることがある。」といった見解を述べている。このような主張や好意的行為に関する反応結果より、高相互性群の方が肯定的な対象イメージを抱いて

Table 2 Comparison of Means and Standard Deviations for High and Low Groups on Accurate Responses

Categories	High Mutuality G. (N = 8)		Low Mutuality G. (N = 8)		U test P
	M	SD	M	SD	
Total R (+ and -)	23.25	5.392	25.00	11.711	.878
Total human (+ and -)	10.25	3.655	7.88	5.194	.160
Differentiation					
Developmental index	27.63	8.798	22.29	16.859	.130
Quasi-human detail	1.75	1.669	.75	1.165	.194
Human detail	2.25	1.165	1.43	1.134	.382
Full quasi-human	1.63	1.847	1.43	2.150	.798
Full human	4.13	1.458	3.57	2.820	.328
Articulation					
Developmental index	17.00	5.581	15.29	9.000	.328
Perceptual	8.75	2.765	7.29	5.851	.234
Functional	4.13	1.959	4.00	4.082	.506
Integration: Motivation					
Developmental index	7.00	5.581	5.00	5.323	.328
Unmotivated	5.00	2.777	4.14	3.388	.382
Reactive	.13	.354	0.00	0.000	.720
Intentional	.75	1.165	.25	.707	.646
Integration: Object-action Integration					
Developmental index	18.25	11.068	13.25	11.209	.278
Fused	0.00	0.000	0.00	0.000	1.040
Incongruent	.25	.463	.38	.518	.720
Nonspecific	4.75	2.866	3.50	2.976	.287
Congruent	.88	1.126	.50	.756	.574
Integration: Interaction of Objects					
Developmental index	11.75	6.251	9.63	7.210	.574
Active-passive	.63	1.408	.25	.707	.720
Active-reactive	.13	.354	0.00	0.000	.720
Active-active	3.63	1.768	3.13	2.232	.646
Integration: Content of Interaction					
Developmental index	11.00	6.141	7.63	5.999	.234
Malevolent	1.00	1.690	1.13	1.642	.720
Benevolent	5.00	2.449	3.25	2.375	.160

いると同時に、より積極的な対象関係を営むことが予想される。次に、対象概念の発達水準を示すカテゴリーのうち、分化ならびに対象と行為の統合における発達指数の差が認められたことから、高相互性群の方がより高い発達水準で対象をとらていることになる。「内的世界は、外的世界についての知覚を形づくるだけでなく、性格構造を通じて、個人の対人関係の領域にも影響を与える。」と Kernberg¹¹⁾は言っている。このように内的世界

(自己表象)が外的世界(対象表象)に投影されているとするならば、高相互性群において高い発達水準での対象表象が認められることは、高い発達水準の自己表象を推論することができる。また、Blatt & Lerner⁴⁾の、「進行中の対象関係(ongoing objects relations)が表象過程の発達の一部として内面化され、パーソナリティ構造の一部となる。」と主張するように、外的世界での経験によって、内的世界の修正が行われることがある。相互

Table 3 Comparison of Means and Standard Deviations for High and Low Groups on Inaccurate Responses

Categories	High Mutuality G. (N = 8)		Low Mutuality G. (N = 8)		P
	M	SD	M	SD	
Differentiation					
Developmental index	1.38	2.774	1.38	1.506	.506
Quasi-human detail	.13	.354	.50	.756	.234
Human detail	.38	.774	0.00	0.000	.234
Full quasi-human	0.00	0.000	.13	.354	.720
Full human	.13	.354	.13	.354	1.040
Articulation					
Developmental index	.25	.707	.75	1.165	.442
Perceptual	0.00	0.000	.25	.463	.442
Functional	.13	.354	.25	.463	.720
Integration: Motivation					
Developmental index	.50	.756	.25	.707	.506
Unmotivated	.50	.756	0.00	0.000	.243
Reactive	0.00	0.000	.13	.354	.720
Intentional	0.00	0.000	0.00	0.000	1.040
Integration: Object-action					
Integration					
Developmental index	1.00	2.070	.38	1.061	.442
Fused	.25	.463	0.00	0.000	.442
Incongruent	0.00	0.000	0.00	0.000	1.040
Nonspecific	.25	.707	.13	.354	.960
Congruent	0.00	0.000	0.00	0.000	1.040
Integration: Interaction of Objects					
Developmental index	.63	1.408	.13	.354	.646
Active-passive	.25	.463	.13	.354	.720
Active-reactive	0.00	0.000	0.00	0.000	1.040
Active-active	.13	.354	0.00	0.000	.720
Integration: Content of Interaction					
Developmental index	.63	1.061	.13	.354	.382
Malevolent	.38	.518	.13	.354	.442
Benevolent	.13	.354	0.00	0.000	.720

性の程度だけでなくその質の検討も必要になってくるが、同一性形成過程で積極的な対象関係を経験することは、自我同一性の確立といった心理・社会的発達課題の遂行につながるようである。

2) 症例による検討

前述した2群の中から、1名ずつ抽出し、事例的検討を加える。こうした作業は、それまでに出された一般的结果の個性化された姿を見出し、先の結果の妥当性を確かめることになる。

○Case S (High Mutuality G.) ♂ 20才 バ

スケッチボール選手 競技経験年数・9年 同一性得点・68 相互性得点・41 (Crisis: 13, exploration: 18, commitment: 10)

高校から今日までレギュラー選手として活躍している。高校時代は上下関係や練習の厳しい運動部に所属しながらも、主体的にとり組んでいた。高2「友人関係も広がり、またバスケットのおもしろさもわかってきた。」高3「大会を目標にして、練習には意欲的に参加した。」大学に入ってから、部そのものの雰囲気も手伝い、さらに自主的、意欲的になっている自分を意識している。S

はこれまでの生活をふり返り、強い危機を経験した領域として、「チームメイトとの関係」、「自分の競技成績」、「望ましい生き方や価値の追究」をあげている。特に価値感に関する領域に対して、「大学に入ってから継続的に日常生活の中で疑問を感じたりすることがある。自分を固めないで、常に柔軟性を持ち自己改革するよう務めている。」と言っている。こうした危機に対して、Sは大学入学後経験し、その解決・克服に向けてかなり努力しているようである。

Sがロ・テストに投射した対象表象をTable 4、5に示した。

高相互性群の総人間反応数の平均10.25と比較すると、Sの7は低いようである。しかし、それらは発達水準の高い分化を示唆するHや(H)であることを特徴としている。表象の明細化は特に広範にわたっているわけではなく、行為者の姿勢(Po)に集中しているようである。そして、いずれの対象概念も行為の動機がうかがわれ、発達水準の高い2つの意図的行為が認めれる。またそれらの行為は、対象との統合度も高いようである。行為の内容は1つの悪意的内容(「手から武器が出ている」)が含まれるが、全般的に肯定的なイメージで対象を多く受けとめているようである。対象の相互関係の認められたものはいずれも積極的・積極的(A-A)とスコアーされているが、その反応の多くは平凡反応(popular)である。そしてXカード(No.5)の反応は、その他のカテゴリーで高い発達水準を示しているものの、相互関係が認められない。より個性的な自己表現を適応的に展開しようとした時、それは対象との相互関係の中で積極的に行われるというよりも、限定された世界で行われるのかもしれない。

○ Case K (Low Mutuality G.) ♂ 20才
サッカー選手 競技経験年数・6年 同一性得

Table 4 Object Representation Responses in a High Mutuality Case

III 1	人間が2人で何かやっている。 〔顔、足、首、腰。女の人。(何かやっている) 2人が手を伸ばして、カゴに入っているものをどこかに移動しようかというところ。2人で話し合っている。〕
2	2人で支え合っている。 〔これ持っていると仮定すると、この角度からいくと、足がまっすぐだから(Res ①との関係)関係ない。新たに2人がいる。手をつけて維持している状態。足がつっぱっている。〕
IV 1	巨大な怪物。 〔足なんですけど、この足に比べて顔の部分が小さくて。手、この手から何か武器が出ている。シッポ。(巨大)横幅があって足が大きい。こっちに向けて歩いているよう。〕
VII 1	2人の子どもが何かの上に乗って遊んでいる。 〔ヒザを折って落ちないように手を広げてバランスをとっているところ。(何かの上)何かよくわからないが、かどののって落ちないようにしている。〕
X 3	上でウサギみたいな感じの、2人で根くらべをしている。 〔(根くらべ) 2匹が向い合っている。それは押し合っている。目、口、顔、手の感じがウサギに似ているよう。〕
4	黄色の部分が何か成長している。 〔まだ人になっていなくて、これがタマゴのところ。中が成長している。黄色は糞分で、赤いところが核分裂しているところ。〕
5	人が逆さまになって叫んでいる。落ちながら。 〔(人) 足、手、逆さまになっている。下に落ちている。助けてくれーと何かを、この部分が、その叫び声をあらわしている。〕

点・55 相互性得点・11 (Crisis : 4, exploration : 3, commitment : 4)

高校からサッカーを始めたが、当時は試合のための「かり出し要員」的存在であり、サッカーへ

Table 5 Developmental Scoring of Object Representations in a High Mutuality Case

Card No.	Differentiation (Inaccurate:—)	Articulation		Motivation of Action	Integration Object-Action	Content of Action	Nature of Interaction	
		Perceptual	Functional					
III	1	H (Popular)	Po	Sex	Unmot	Nonsp	Ben	A—A
	2	H (Popular)	Po	—	Unmot	Nonsp	Ben	A—A
IV	1	(H)	Sz, Po, Pst	—	Unmot	Nonsp	Ben	—
VII	1	H (Popular)	Po	Age	Int	Con	Ben	A—A
X	3	(H)	Po	—	Unmot	Nonsp	Ben	A—A
	4	(H)	—	—	Unmot	Nonsp	Ben	—
	5	H	Po	—	Int	Con	Ben	—

のかかわりは低かった。本格的にとり組むようになったのは大学入学後である。1年の時は適応できずにいたが、現在は上級生にリードされながら活動を継続している。「チームメイトとの関係」：「まわりの友だちが良いやつが多かったから」、「指導者との関係」：「あまりかかわりがなく、コーチの私に対する評価と自分自身の評価に差がほとんどないから」、「勉強とスポーツの両立」：「あまり真剣になってスポーツや勉強にとり組んだことがない。」このようにKは、これまでに経験してきた諸々の生活領域の中で、特に強く記憶する程の危機はなかったようである。また、現時点で強く自己投入している領域もないようである。

Table 6, 7にKの口・反応の分析結果を示した。

6つの人間反応のうち、発達水準の最も高いとされるH反応は1つにすぎず、(Hd)の多いことが注目される。その反応内容は、悪魔の仮面、怪獣の顔、宇宙人の上半身であり、これらからは対人場面での不安、不快感といった心理的内容が考えられる。こうした場合、成熟した対人関係を持ち得ないことが多い。対象概念の行為は、IIIカードの平凡反応に、発達水準の低いものが1つ認められるだけであり、他は全て行為のない(NoAct)対象概念である。したがって、他の行為の側面に関してはスコアリングの対象とならず、統合の全般的発達水準を極端に下げているようである。LernerやBlattらの報告する精神病理群の資料よりも、Kは低い値を示している。しかし、病理群では不良形態反応においても若干のスコアリング対象となる反応を出していることから、Kの場合は基本的な現実検討のなされた範囲での対象関係の低さを意味し、病理像と結びつけることはできない。

以上2つの症例をとりあげ、口・テストに投射

Table 6 Object Representation Responses in a Low Mutuality Case

I 2	仮面。 〔悪魔の仮面に見える。耳、目がつり上っていて、口がさけている。(仮面)紙でできていて、後にゴムがあるような、小さい子どもの時の仮面。〕
III 1	黒人が2人向い合ってタイコをたたいている。 〔黒人がこれで、足、手、頭、胸が出ていて女性、タイコをたたいている。(黒人)裸でいて色が黒いし、頭の形、何か首かざりみたいなのして。〕
VIII 2	顔、マンガに出てくるような女の怪獣の顔みたい 〔リボン、顔の輪かく、口、目。(女の怪獣)女というのはこのリボンから、怪獣は、目、口が普通より大きくて、マンガに出てきたように思ったから。〕
IX 1	怪獣、宇宙人の顔、上半身。 〔パッと見てこれが目に見えて、あと頭、耳、肩から上のところ。(宇宙人)ウルトラマンとかに出てきそうな、人間的、頭の大きいところが。〕
X 1	ヒゲをはやした顔。 〔目、ヒゲ、鼻、この辺くらいまで。あとは関係ない。〕
3	怒った顔。 〔反対に見て、つり上ったマユで、口、鼻。(怒った)つり上ったマユで。〕

された対象表象について個々に検討を加えてきた。先の法則定立的接近法 (nomothetic approach) による両群間の比較では、統計的に有意な差を見るまでにはいたらなかった。しかしこの2人の症例検討 (個性記述的接近法 : idiographic approach) では、相互性の程度と対象表象の間に特徴的な差を認めることができた。SはKよりも積極的に対人関係を結ぶことができ、しかも高い発達水準の対象表象が形成されているようである。Kの相互性が低かったのは、単に生活場面での

Table 7 Developmental Scoring of Object Representations in a Low Mutuality Case

Card No.	Differentiation (Inaccurate:-)	Articulation		Motivation of Action	Integration Object-Action	Content of Action	Nature of Interaction
		Perceptual	Functional				
I	2	(Hd)	—	—	NoAct	—	—
III	1	H (Popular)	Po, Pst	Sex	Unmot	NonSp	Ben A - A
VIII	2	(Hd)	Sz, Cl	Sex	NoAct	—	—
IX	1	(Hd)	Sz	—	NoAct	—	—
X	1	Hd	Hsy	—	NoAct	—	—
	3	Hd	—	—	NoAct	—	—

危機的状況が少なかったことによると考えるだけでなく、彼の対象表象も関係しているようである。彼はこれまでの生活の中で、対象との距離をとり、表面的な交渉をとることが多かったようである。同一性形成の契機となる諸領域の中で、自己の働きかけと同時に、対象からの働きかけによって、同一性の感覚が生み出されるとするならば、Kは自我同一性形成といわれる課題達成に対して消極的な歩みをしてきたと言える。Kの同一性尺度による得点は、大学運動選手を対象として求められた値 ($M=63.3, SD=7.83$)¹⁹⁾ と比べ、55と低い値を示している。

まとめ

中込らの自我同一性形成過程尺度から求められた相互性を、ロ・テストに投射された対象表象から検討を加えた。45名の対象者の中から高相互性群 ($N=8$)、低相互性群 ($N=8$) を抽出し、各対象者のロ・反応プロトコルにBlattらの対象関係スケールが適用された。高相互性群は低相互性群よりも、対象表象の分化に関する発達指数 ($P=.130$)、疑似人間部分反応 ($P=.194$)、好意的行為 ($P=.160$)、そして総人間反応 ($P=.160$) といった下位カテゴリーにおいて、やや有意な傾向をもって高い値を示した。

さらに、両群を代表する2つの症例に対して詳細に検討が加えられた。両ケース間の差異は、先の研究結果をより明確にするものであった。これらの結果から、相互性の高い者は、より積極的に対人関係を結ぶことができ、しかも高い発達水準の対象表象が形成されているようである。また、こうした対象表象の特徴は、同一性形成過程における相互性を促進させる心理的背景とも考えられる。

本研究では、相互性をcrisis, exploration, commitmentの3側面の水準に限定した。さらに、相互性の質的検討を加えることにより、自我同一性形成との関わりが明らかになるものと考えられる。

本研究の一部は昭和60年度科学研究費補助金奨励研究(A) 60780121によった。

注の説明

注1) Eriksonは各発達段階に対応して、最も影響力があり、そして最も深い心理的かわりをもつ

てくる重要な対人関係の範囲を示している。その中で発達主体者は、一方的に働きかけるだけでなく、「働きかけるとともに働きかけられる」ような経験を通して、人格発達を行っていく。こうした人格発達に資するような関係を「相互性」と呼んだ。

この「相互性」は臨床的概念であり、測定的研究を進める場合、限界を踏まえながらも操作的に扱う必要にせまられる。中込ら¹⁹⁾は運動選手の生活空間を反映し相互性を発揮する可能性のある領域を設定した(例えば、「チームメイト」、「競技成績」、「指導者」他)。そして、それぞれの領域での危機様態(crisisからexplorationの過程)、特にexploration(危機解決への探究・努力)の広がりや深まりは、対象からの働きかけが関係していると仮定している。本研究の中では、crisis, exploration,そして現時点での各領域に対するcommitment(自己投入)の水準の総和を各個人の相互性の程度としている。

注2) Blattらのこの尺度は、WernerやPiagetの認知発達理論と、精神分析的自我心理学を背景としている。ロ・テストに投射される対象表象を分化、明細化、統合といった3つの側面から発達の分析を行っている。つまり、発達の対象の分化の程度が増し、特性の明細化が進み、思慮深く動機づけられ、そして目的的な行為や相互作用の増加することを仮説としている。

注3) 6つの下位カテゴリーにおける各観点は、それぞれ低発達水準から高発達水準へと発達の階層をなすよう配列されている。

Lernerらは各カテゴリーの発達水準の差を査定するために、低発達水準を1点とし、高発達水準へ階層が移行するに従って、2, 3, 4点と配点を増やしている。各カテゴリーごとにその合計点が求められたものを発達指数(developmental index)とした。例えば、($Hd \times 1, Hd \times 2, (H) \times 3, H \times 4$) といったように、それぞれの反応数を処理することになる。

引用・参考文献

- 1) Adams, G.R., and Fitch, S.A., "Psychological environments of university departments: Effects on college students' identity status and ego development," *Journal of personality and Social Psychology*, 44 : 1266-1275, 1983.
- 2) Blatt, S.J., Brenneis, C.B., and Schimek, J.G., "Normal development and psychopathological impairment of the concept of the object on the Rorschach," *Journal of Abnormal Psychology*, 85-4 : 364-373, 1976.

- 3) Blatt, S.J., Brenneis, C.B., and Schimek, J.G., "A developmental analysis of the concept of the object on the Rorschach," Unpublished paper, 1976.
- 4) Blatt, S.J., and Lerner, H.D., "The psychological assessment of object representation," *Journal of Personality Assessment*, 47-1 : 7-28, 1983.
- 5) Donovan, J.M., "Identity status : Its relationship to Rorschach performance and to daily life pattern," *Adolescence*, 10 : 29-44, 1975.
- 6) 遠藤辰雄(編), アイデンティティの心理学, ナカニシヤ出版, 1981.
- 7) Erikson, E.H. (1959), *Identity and life cycle : Selected papers*, *Psychological Issues*, 1 (1), 小此木啓吾(訳), 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—, 誠信書房, 1973.
- 8) Erikson, E.H. (1964), *Insight and responsibility*, W.W. Norton & Company, 鎌幹八郎(訳), 洞察と責任, 誠信書房, 1971.
- 9) Fry, P.S., "Developmental changes in identity status of university students from rural and urban backgrounds," *Journal of College Student Personnel*, 15 : 183-190, 1974.
- 10) 片口安史, 新・心理診断法, 金子書房, 1974.
- 11) Kernberg, O. (1976), *Object relations theory and clinical psychoanalysis*, Jason Aronson Inc., 前田重治(監訳), 対象関係論とその臨床, 岩崎学術出版社, 1983.
- 12) Lerner, H.D., and Peter, S., "Patterns of object relations in neurotic, borderline and schizophrenic patients," *Psychiatry*, 47 : 77-92, 1984.
- 13) Lerner, P.M., "The assessment of interpersonal relations by means of the Rorschach," in Lerner, P.M. (ed.), *Handbook of Rorschach scales*, pp. 324-357, New York : International Universities Press. Inc., 1975.
- 14) Marcia, J.E., "Identity six years after : A follow up study," *Journal of Youth and Adolescence*, 5 : 145-160, 1976.
- 15) Marcia, J.E., "Identity in adolescence," in Adelson, J. (ed.), *Handbook of adolescent psychology*, pp. 159-187, New York : John Wiley & Sons, 1980.
- 16) Mayman, M., "Object—representation and object—relationships in Rorschach responses," *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 31 : 17-24, 1967.
- 17) Morash, M.A., "Working class membership and the adolescence identity crisis," *Adolescence*, 15 : 313-320, 1980.
- 18) 長尾 博・遠藤辰雄他「Ego—identityの研究(9) —自我同一性障害に対するテストバッテリーの試みとその考察—」*日本心理学学会第41回大会発表論文集*, pp.886-887, 1977.
- 19) 中込四郎・鈴木 壮「運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験(I)—Eriksonの相互性からみたスポーツ経験の特徴—」*体育学研究*, 30 : 249-260, 1985.
- 20) Pruitt, W.A., and Spilka, B., "Rorschach empathy—object relationship scale," *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 28 : 331-336, 1964.
- 21) Rowe, I., and Marcia, J.E., "Ego identity status, formal operations, and moral development," *Journal of Youth and Adolescence*, 9 : 87-99, 1980.
- 22) 佐方哲彦「精神分裂病者のロールシャッハ・テストと人物画テストとの関連—現実感覚の測定スコアを中心に」*ロールシャッハ研究 XIII* : 10-24, 1981.
- 23) 鈴木 壮・中込四郎「運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験(II)—競技レベルの低い選手と高い選手の比較—」*岐阜大学教育学部研究報告(自然科学)*, 9 : 89-98, 1985.
- 24) Timmons, F.R., "Freshman withdrawal from college : A positive step toward identity formation? A follow—up study," *Journal of Youth and Adolescence*, 7 : 159-173, 1978.
- 25) Urist, J., and Shill, M., "Validity of the Rorschach mutuality of autonomy scale : A replication using excerpted responses," *Journal of Personality Assessment*, 46 : 450-454, 1982.